

『しぐれ』論

—— 中世物語の展開 ——

豊島秀範

一 はじめに

『しぐれ』という物語の梗概から筆を起こそう(○印の数字は、後の系図に対応している)。

(A) 二条万里小路に住む左大臣(①)に、女御として入内すべく宣旨を得た(姫君)(②)がいた。ところが、その姫君は、病のために清水に参籠していたので、兄の(中將さねあきら)(③)が見舞いに出かけた時に、にわか雨に困っていた姫君に出会い、傘を貸した。この(姫君)(④)は、三条東洞院に住んでいる(故中納言きんかね)(⑤)の娘で、八歳の袴着の時に女御の宣旨を受けたが、一〇歳の時に父中納言と母とを失い、その後は(乳母)(⑥)とともに過ごしていた。

(B) 中將は、傘を貸したことが機縁で、この姫君を自邸に引き取り、契りをつ結んだ。それは、清水寺の別当が、姫君を見初めて、乳母と画策して我がものにしようとしたために、その手から逃れようとして、中將に助けを求めたためでもある。

(C) ところが、中將の父左大臣は、(右大臣)(⑦)の要請で、右大臣の(姫君)(⑧)と、わが子の中將との婚姻を承諾してしまう。中將はやむを得ず姫君の許に通ったが、三日目に、右大臣の北の方の要請で(もの知り)の仕掛けた呪詛により、正氣を失い、三条東洞院の姫君のことを忘れ、

右大臣の家に日日を過ごすことになる。

(D) 一人残された三条東洞院の姫君は、中將の心の変化を悲しむ。そして、左大臣夫妻が、自分の姫君の女御入内に、女房として付き添わせようとしたことをよしとせずに、侍従の伯母に当たる(丹後の内侍)(⑨)に助けを求めて、身を寄せた。この姫君は、女御の宣旨を蒙りながら、父母が逝去したことから後見を失い、参内は中止となっていたという事情があったことを知っていた内侍は、姫君が自分の所に居ることを(帝)(⑩)に奏上したところ、帝は、仏名の聴聞の折に、姫君を参内させるよう、強く内侍に要請した。しづしづ仏名の聴聞に参内した姫君は、帝によって強引に承香殿に迎えられ、その寵愛を一身に受けることとなった。

(E) その直前に、左大臣の姫君は女御として麗景殿に参ったが、帝の寵愛は得られない。事情を知らない中將は、妹麗景殿への冷淡な帝の態度に反発して出仕しない。ある日、中將は、妻である右大臣の姫君の家に向かう途中に、右大臣夫妻が呪詛に用いた自分の形代を発見し、一切の状況を知った。承香殿の女御が、自分が愛していた姫君であることも確認し、衝撃を受ける。そして、髻を切って承香殿に届け、比叡山の横川で出家した。

(F) 妻である右大臣の姫君は、このことを知って落飾し、父の左大臣も世を捨てた。承香殿の女御も、中將の出家を聞いて悲しむが、落飾も叶わ

ずに、三皇子・二皇女を儲け、皇后となって栄えた。
 (G) 承香殿の果報も、中將がまことの道に入ったのも、みな観音の利生であるという。

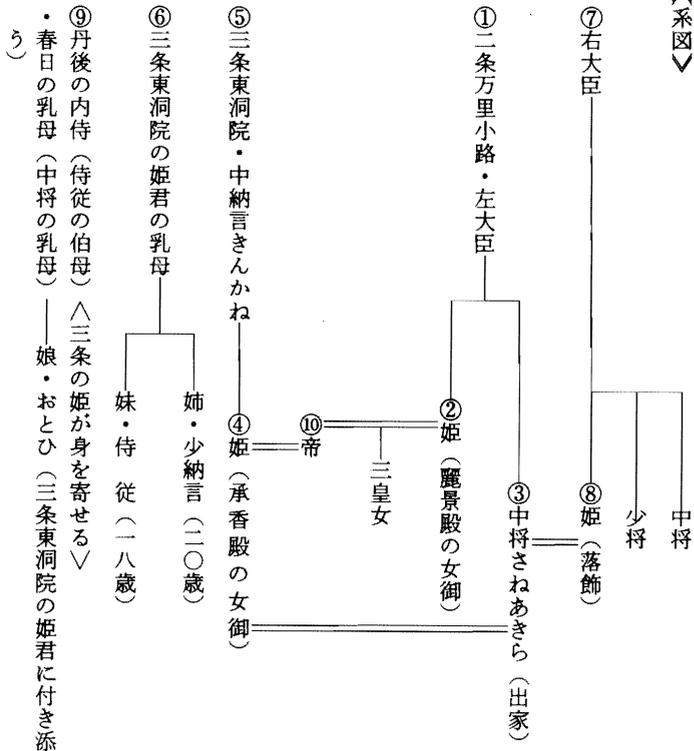
以上のように、(A)(B)で清水寺を舞台に開始された恋愛物語は、(C)での中將の望まぬ婚姻で転機をはらみ、(D)で三条東洞院の姫君の苦境が始まる。それは(E)で帝の寵愛を得ることで表面的にはめでたくおさまるのであるが、(F)で姫君のことを知った中將が出家することで、物語は急展開を告げる。しかし、中將の出家も、三条東洞院の姫君の繁栄も、すべては観音の利生によるものだという(G)が物語を締めくくる。

このように、室町時代中期以後に成立した『しぐれ』という物語は、主人公へ中將さねあきらへの悲恋遁世の物語であり、同時に、ヒロインである三条東洞院の中納言の姫君(承香殿の女御)の立場からすれば、女御の宣旨を蒙りながらも、幼くして両親を失い、失意の時を過ごしていたが、中將に救われ、最後には帝の寵愛を得て、皇后として栄えるという物語でもある。さらには、末尾で、清水観音の靈驗譚の形を採ることによって、中將・承香殿女御の両者の立場を救済しているのである。

清水寺での〈雨やどり〉を機縁として始まり、出家遁世の悲恋物語と、衆達の物語とが合わさって、最終的には観音による救済という結構を持つ『しぐれ』は、全体としては、鎌倉時代以降の物語によく見られる特徴を踏襲した物語であるといえる。ただし、中世の物語の多くは、苦境に陥っているわが子を、出家している親が見かねて救済に現れる、あるいは既にこの世にはいない親の霊がわが子を救うという形を採っており、そこに中世の物語の特徴を認めることができる。ところが、『しぐれ』は、その逆のスタイルを採っている。つまり、親は、子供を救ってはいないのだ。親のへ子を思う心の闇ではなく、それを反転させた形になっている。それは何故であらうか。また、そのことと、観音による救済とはどのように関わるのか、さらには、付加疑問のような形で添えられている宗教的救済とは、この物語において、

どのような意味を持つのかについて考えてみたい。

〈系図〉



二 闇に迷う子供

『しぐれ』(注1)という物語名は、平出鏗二郎が『近古小説解題』で『雨やどり』として解説している作品であるが、『雨やどり』は、『しぐれ』とは全く別の内容をもつ物語であり、物語名が混同された経緯についても、『室町時代物語二』(古典文庫)の解説に詳しく述べられている。平出は、『近古小説解題』で「その細條、この頃の物語としては、殊に面白く思はる」(二三三頁)

と述べているが、『しぐれ』は伝本も多く、当時としてはそれなりに認められていた作品であったことを窺わせる。

ところで、中将が、承香殿の女御が三条東洞院の姫君であることを確認して落胆し、その悲しい心を、乳母の娘であるへおとひに告げる場面が、次のように記される。

(H) 中将殿、涙をおしとどめ、のたまひけるは、「當時世に隠れなき(隠れなく一岡田本・多和文庫本)ときめき給ふ承香殿はこの姫君なり。侍従も、古里の親子も、皆添ひ参らせてありつるなり。この日頃、見出だし、さこそつれなく見給ひつらん。情なく思ひ出されずは(追ひ出されずは一岡・多)、りいけいでん(れいけいてん一岡・多)も、中空にはよもならじ。我もものは思はじ。あはれ、うたてかりける二人の親かな」と、

「子供は皆闇に迷ふ。わが身もよき心に(心は一岡・多)したまはじ。我これにあらむことも今日と明日とのほどなり。我あらむほどは、おとひも、よも召されじ。我なからん後は、侍従を訪ねて承香殿へ参れよ。情ある人なれば、追ひは出だし給はじ。六位の臣に持たせたりし形代のことをも、ありのままに申せば、ふのの(申せよ。ものの一岡・多)迷

はしの身となりて、遂に別れ参らす今生こそ縁薄くとも、来世にては、一つ蓮の身となり参らせんと申せよ。汝も、我に添ひたりと思ひて、よくよく宮仕い参らせよ」など、来し方ゆく末のことども、泣く泣く語り給ひければ、おとひもあまりの悲しさに、声をたててぞ泣きけり。(一四三頁)

藤原兼輔が「すまひのかへりあるじ」の時に「まらうどあるじ酒あまたたびの後酔にのりて子共のうへなど申しけるついでに」詠んだ歌、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰集』一一〇三)は、以後、多くの物語に引用された。特に、わが子と生別・死別を余儀なくされる状況を多く採用した中世の物語においては、「子を思ふ道に迷ふ」その状況を、いかに設定するかに苦心し、子供を思う親の心は、俗世間との交渉を断った

はずの僧であっても、下界におりることを仏は許すものだ、という解釈も呼び込んでいる。それほどに親子の心の結び付きは強いものである、という根拠をなす梓組を是認することによって、苦境に陥る子供たちを描くことも可能なのであり、数多くの継子物語が描かれているのも同様の状況による。

ところが、この『しぐれ』では、そうした親子の心のつながりを、ほとんど配慮していない。父の左大臣が、中将に右大臣の姫君との結婚を勧める場面での北の方とのやり取りは、「誰も若くては、に候はすか(誰も若くて恋はする一岡・多)。我らも昔は思ふ仲を離れたりし初めは、さこそ思へども、程経ぬれば常の習ひなり」(四〇頁)という醒めた意識であり、「我が姫君の女御まふでの時も、右大臣たち添ひてもてなさむ、誰かわ(並ぶ一岡・多)べき。中将も、世になからん者よりは、この大臣に近づきたらむは、よろづ目安かるべし。これにある者(三条東洞院の姫君)をばのきたらん、ゆめゆめ恨みあるまじ」とのたまへば、母上も「さありなむ」とおぼして、中将殿を呼び給ふ」(四一頁)と、きわめて現実的な対応に終始している。これを見る限りでは、「著作年代詳ならざれど、室町季世のものにして、宮中のことに通ずる、公家衆の作なるべし」とする平出の指摘も肯けよう。清水寺を舞台として物語が始まり、最後は観音の利生で締めくくる梓を填めながらも、それには説得力が欠ける原因もそこにある。

以上のような左大臣夫妻の意識を受けて、(H)に引用した「あはれ、うたてかりける二人の親かな」という中将の嘆きがあるのだが、物語の終盤に至ってのこうした中将の悲嘆は、唐突の感をまぬがれまい。むしろ、右大臣方の行った呪詛の形代を発見して後、乳母子のおとひに事情を聞き、自分の両親が、おとひの母である春日の乳母の許に行くようにと姫君に命じて、その後には姫君の行方が判らなくなったことは確認している。そのために、中将としては、自分の両親が「情なく追い出されずは、麗景殿も中空にはよもならじ」という思考経路をたどっているはずだ。だが、麗景殿の女御に付き従っている侍従にしても、帝が三条東洞院の姫君の話の内侍から聞いて伝名の聴

聞の折に何とかして姫君を宮中に参内させるようにと要請したのを受けて、執拗に仏名の聴聞の功德を説き、あげくには、聴聞の功德によって、生き別れになっている自分の母に逢えるかもしれないと訴えた。しかし、侍従の母と姉の少納言は、三条東洞院の姫君が清水寺に参籠した時に、清水寺の別当の願いを聞き入れて、姫君を別当に渡そうとして画策した人物なのであった（一九頁）。そのことを侍従から知らされた姫君は、「僧とは何ぞや」（二〇頁）と驚き呆れて、侍従の計らいで、清水寺に宿泊していた中將に救いを求めたのである。そのことを姫君も忘れてははずはあるまい。それでも、母や姉と別れて自分に従ってくれている侍従の心中を察した姫君は、仏名の聴聞に参内する決心をしたのだが、この時に侍従は、内侍の指示を受けて、帝が姫君に執心していることを知っており、参内することで、姫君が帝と関係を持つことになるだろうという予測もあつたはずだ。いや、むしろ、姫君の侍女の侍従としては、姫君にそのような関係になつてくれることを望んでいたのかもしれない。その意味では、侍従は、姫君の忠実な侍女であるとも言えよう。

しかし、中將の立場からすれば、手放して侍従を認めることは出来ないはずである。清水寺での姫君をめぐる一件を思えば承香殿の女御に「侍従も、古里の親子も、皆添ひ参らせてありつるなり」という状況は信じ難いことであり、「侍従は」情ある人なれば、（おとひを）追ひは出だし給はじ」などと、容易には言いたくない心境でもあるはずである。まして、侍従は、姫君の乳母である母と、姉の意向に逆らつて、姫君の救済を中將に求めたのである。その経緯を忘れたかのごとくに、姫君が承香殿として入内する際に、わざわざ母と姉を迎えに行つて姫君の許に招き入れるという侍従の行為をどのようになんか化すればよいのだろうか。そうしたところに、一貫性した描写姿勢の欠落がある。それは、主人公である中將や侍従などの登場人物の姿勢というよりは、物語そのものの質に求めるべきものであろう。もしも、そうした点に主眼を置いて描こうとしていたのであれば、このような一貫性のない記

述はしなかつただらうと思われるからである。

しかし、そうした心理的描写の破綻を見せながらも、中將はこの俗世に見切りをつけ、最後の参内に向かうときにも、

たらちねの親の心の闇ゆへに暗き道にやなを迷はまし（つゞ）くらきみちにも
猶やまよはん（多）（一四八頁）

と自らの心を詠んでいる。確かに、左大臣が承知した中將と右大臣の姫君との結婚は、親の一方的な要請によるものであつた。だが、そのこと自体は、中將と三条東洞院の姫君との障害を越えての更なる物語の発展を促しこそすれ、すぐに出家遁世の方向を決定付けるものになるとは限らないはずである。それにも関わらず、逆の意味で親子の絆を強調することによって出家を決意させたり、また、一方では、容易に親子の絆を求めてしまふ侍従の意識を描いている。さらには、その侍従を「情ある人」として（おとひ）に語る中將の心を描写している。こうした描写が生じるのは、（人の情）（親子の情愛）をテーマをすべきであるという、この時代の物語の風潮が、無言の圧力として機能しているからであらう。

ところで、兼輔の歌の表現に関わる記述が、もう一箇所ある。それは、三条東洞院の姫君が、承香殿の女御として入内するに際して、侍従が、姫君の乳母である母と、姉の少納言を迎えに行つた場面においてである。

（一）（侍従）「姫君こそ思ひのほかのたよりにて、時の女御に参らせ給ひて候へ。帝より『御乳母召せ』と候ふ。いざさせ給へ」と申せば、母は嬉しきなかにも、落つる涙を押さへて、「姫君こそ御心（まごころ）つよくわたらせ給ふとも、それには何とか訪れじたまはざるべき。あわれ、親の思ふほどはなかりける（おやおも（まごころ）うほとはこわなかりける一岡。おやお思ふほどはこはなかりけり（多））とて泣きければ、侍従申すやう、「何事もかか（まごころ）る（何事もみなかか（まごころ）る一岡・多）めでたき御事どもにならせ給ふべきはしにてこそ候へ。何かのことは、入れ候ふまじ」とて……。（二〇九頁）

伝本によつて異同はあるが、右の引用文で乳母が語つた「親の思ふほどは子

はなかりけり」という表現は、どのような意図を含んでいるのか理解しにくい。原文の意味は、〈親が思っている程には、子供は思っていない〉というところであろうが、それでは文脈にそぐわない。乳母としては、母である自分の意志に反した、娘・侍従の今までのやり方を気に入らないことだと思っているのかもしれない。その直後に「泣きければ」とあることからすれば、そうなのかもしれない。また、その後が続く侍従の言葉も、理解し難い。かつての母と姉少納言の行為は、めでたい承香殿の入内の際して恥となることなので、それらのことは他の人の耳には入れたくない、という侍従の言葉であると解釈しておくが、それとて適当かどうかは判らない。

そうした状況を勘案すれば、「親の思ふほどは子はなかりけり」という記述は、中將が両親に対して思ったように、むしろ、その逆の意味で侍従に意識されていたと考えることもできる。ある意味では、この物語の書き手の意図的な意図のあらわれであるのかもしれないが、十分に文脈に下りているとは言えない。しかし、それでもこの表現を用いるところに、〈親子の情愛〉と同様に、この時代の特徴から逃れられずにいる書き手の心境を窺うことができよう。

三 形代によるへまつりごと

ところで、かなり強引な記述の目立つ物語にあって、さらに注目すべきものは、形代による呪詛である。その様子は、後に中將によって発見されたことで、次のようにきわめて具体的に記されている。

(J) ……長さ五六寸ばかりある形代にてぞありけり。…男と女と、うち

笑ひて、抱きあふたる形なり。身にものをぞ書きたりける。男の身には右大臣の姫君のことを書き、おんなの身には頭の中將のことをぞ書きたりける。見るに身の毛よだちて、恐ろしくぞ覚ゆる。これが仕業にてこそ、古郷のことは忘れける。心憂さかなや(こころうきかなや—岡・多)。

(一一二五頁)

これは、右大臣の姫君と強引に結婚させられた中將が、三条東洞院の姫君に心を寄せているために、世間体もあり、三日間だけは通おうと思っていたのだが、その中將の気持ちを見抜き、不安に思った右大臣の北の方・姫君・乳母が相談した折に、乳母が次のように提案したことと対応している。

(K) ……御乳母申すやう、昔もあることなればこそおまつりといふ事をば申し伝へて候へ。あわれ、まつりて見候はばや」と申しければ、北の方、「よきやうにはからへ」とありしかば、やがて、物知りをを召す。参りたり。乳母、「かやうのこと」と申せば、物知り、「やすき御事なり」とて、おまつりをぞしたりける。(六八頁)

〈男女が抱き合った形のものを〉作って、〈おまつり〉と称する呪詛をおこなう。それを、乳母も〈物知り〉も、こともなげに言っている。こうしたことと自体が、強烈な印象を与えるのであるが、それ以上に、この〈おまつり〉なる呪詛は、物語を大きく束縛することになる。

『しぐれ』が、登場人物に一貫した心情を持たせることができなかつたのは、こうした〈おまつりごと〉のような素材を投入したと無縁ではない。この〈おまつりごと〉によって、中將の心は空白状態を呈し、そのために、姫君との心的交流を不可能にしたからである。中將が、そのような状態にいるかぎり、中將には姫君への思いが遮断されているのであって、姫君の苦悩がいくら深いものであっても、それは空振りに終わらざるを得ないからである。しかも、中將がそのことに気づいたときには、もう間に合わないという結果が用意されている。これでは、何等かの障害に向かつて、中將と姫君とが共に苦悩するという状況はうまれない。

ただ、〈おまつりごと〉によって、物語の局面を大きく展開させようとしたことは、この物語においては、意欲的なもくろみであった。結果的に成功しているかどうかは措くとして、従来の中世の物語から多少とも抜けようとする意識が感じられるからである。あるいは、書き手にとって、こうした〈おまつりごと〉は、決して虚構ではなかつたのかもしれない。〈伝名の聴聞〉や〈正

月元日の朝拜)などの年中行事を適宜織り込みながら物語の場面を作ろうとしている姿勢に通ずるものがあるからである。宗教的な救済を強調するあまりに持ち込まれた(蘇生)などの信じた要素とは異なり、より現実に対応した素材を投入したということであろう。だが、それにしても物語の末尾に付された観音の利生による記述が、いかにも形式的で付け足しのように響いているのはどうしたことであろう。

四 和歌の多用

ところで、四百字詰の原稿用紙に換算して、わずか九〇枚ほどの短編物語である『しぐれ』にあつて、三五首の和歌が記述されているということは、決して軽視できることではなく、『しぐれ』の物語質を規定する重要な要素となっている。

以下、それらの和歌を列挙してみよう。

〈中將→姫君〉

- (1) たまほこの道ゆきふりに見るよりも契りは深きものにしらずや(みつるより一岡・多。物としらずや一岡・多)

(清水寺で。姫君は中將の文を見ようとしぬ)

〈中將→姫君〉

- (2) 頼もしく枯れたる木にも花咲くと遂げる誓ひは今ぞ知らるる(たのもしや一岡・多)

(傘を貸した姫君であることを確認して、仏の利生に感謝し、姫君と侍従を自宅に伴う)

〈中將の独詠〉

- (3) 人知れず思ひ叶こたへいて行く道に何夕さりの袖ぬらすらむなにゆふきり

(二七頁)

の一岡・多)

(姫君を自邸に伴う途中で)

〈中將→右大臣の姫君〉

- (4) 聞き初めし日より心のあくがれて何時しかぞ待つあふさかの関

(母の厳しい勧めで、いやいや記す)

(四四頁)

〈中將→姫君〉

- (5) みつるよりたち離るべきかたぞなき身にそふ影となりやしなまし

〈姫君→中將〉

(五〇頁)

- (6) 別れても身にそふ影はとまりなむいかなる山の奥に入るとも

(中將、右大臣の姫君との結婚を嘆き、姫君と贈答)

〈中將の独詠〉

- (7) 霰ふる霜さゆる夜にをき別れ身にたましいもなくなぞ行く(あられふり一岡・多。身もたましいも一岡・多)

(五四頁)

(右大臣の姫君との結婚の当日に嘆きながら)

〈姫君→中將〉

(五八頁)

- (8) (姫君)思へどもなをぞ悲しきいかげん身を隠すべきやまなしの花

〈中將→姫君〉

- (9) (中將)山なしと思ひなわびそもろともに深き谷にも身は隠してん

(まだ夜の明けないうちに右大臣の姫君の所から帰宅して贈答)

〈中將→右大臣の姫君への後朝の文〉

(五九頁)

- (10) あわばやとそぞろに物を思はせしむくひに今はとはじとぞ思ふ

(中將、父母に責められて仕方なく書く)

〈右大臣の姫君→中將〉

(六〇頁)

- (11) とわばとも言ふことの葉のことはりや夜深く帰る心ならひに(とはしともいふことのはゝ一岡・多)

(中將、返歌を見ようともしない)

〈中將→姫君〉

(六六頁)

- (12) しきたへの袖には露のおき別れ鳥とともにや音をば鳴くべき

〈姫君→中將〉

- (13) 心をば君があたりにそゑおきてうわの空にや別れ行くらむ(われはゆるらん一岡・多)

(右大臣の姫君の所へ三日目の夜に向かう時に別れを惜しんで贈答。これを最後に中將は姫君の所に戻れないことになる)

〈姫君の独詠〉

(七二頁)

- (14) いつはりを君がちぎりし言の葉にかかる涙のつゆぞ悲しき

(右大臣方の呪詛を知らず、帰らぬ中將に落胆して)

〈姫君、中將との生活を偲んで和歌を記す 鏡に〉(七七頁)

- (15) まず鏡見し面影はしのぶともまたもこの世にいつかあふべき

〈琴に〉

- (16) ややもしもこと問ふ人のありもせばうきねをたてて出でしともゆへ

(もしもこととふへき人の一岡。やゝもしもこととふ人の一多。いてしとそおもひ一岡。いてしともいへ一多)

〈笛に〉

- (17) 慣れしこそくやしかりけりふぬ竹の憂き世の節を聞くにつけてもくやしかりけれ一岡・多

〈枕に〉

- (18) しきたえの枕夜な夜なかざしけんはかなかりける中の契りを(かはしても一岡。かはしけん一多。なかのちぎりは一岡)

〈柱に〉

- (19) 慣れにけんなごりぞ惜しき真木柱また立ちかありむつれしもせじ(なれにける一岡)

〈夜のふすまに〉

- (20) 唐衣重ねしつまを恨みつつ袖に余るは涙なりけり

(姫君はこれらの和歌を書付けて、侍従と内侍の家に向かう)

〈帝→承香殿の女御(姫君)〉

(一一〇頁)

- (21) 見てもまたなをぞ恋しき今日よりは同じ心に君をなさばや

〈承香殿の女御(姫君)→帝〉

- (22) あらためて同じ心になりやせん花にうつろふ君と思へば(けふよりはおなしこゝろに一岡)

(正月の元日に、晴やかな承香殿の女御を見て満足して贈答)

〈中將の独詠〉

(一三〇頁)

- (23) こちくてふ我ぞ悲しきふえ竹のなど節々に音をばたつらん

- (24) いつはりを君に契りし心ゆへ落つる涙の露ぞ悲しき

(中將、姫君の和歌を見つけて、姫君を偲ぶ)

〈中將の独詠〉

(一四七頁)

- (25) みづくきの書き流しけるあと見れば我が身ぞつらき返す返すも(みつくきにかきなかしけん一岡・多)

- (26) 一人こそ思ひ入りぬれ山の葉に尽きせず物を思ふ身なれば(おもひひりぬる一多)

(27) たらちねの親の心の闇ゆへに暗き道にやなを迷はまし(くらきみちにも猶やまよはん一多)

(中将、姫君を偲び、おとひに別れを告げて最後の参内へ向かう)

〈中将→侍従〉

(一五五頁)

(28) 清水の滝の白糸よるよるに思ひは出でよいつの世までも(よりよりに一岡・多)

(29) 清水の滝の白糸乱れついつの世にかわ解けて見るべき

(中将は、切った髻を姫君に渡してくれるよう侍従に依頼して、出家するために比叡山の横川へと赴く。侍従、その姿を見送る)

〈中将の「みどりのたぶさに添えられていた歌」(一五九頁)

(30) 数ならぬ憂き身の咎を思はずは契りしままに伴ひてまし

(31) 君ゆへに山の奥には入りぬともあわれとだにも思ひをこせじ(みやまのおくに一岡・多)

(32) もろともにさしも契りし山の葉に我ひとりのみ思ひ入るかな

(承香殿、中将の髻を見て悲しむ)

〈中将→おとひ〉

(一六七頁)

(33) 花めける花のたもともうらやまず昔の衣ぞ我が身にはつく(はるめける一岡)

(34) 賢ぞ花のたもとをかざしける君がさかへを聞くにつけても(はなのたもとそかわしける一岡。花のたもとをかわしける一多)

(35) みつせ川あふせときくを頼みにて死出の山路の急ぎをぞする(中将入道、承香殿の女御たちの繁栄を聞いて送った歌)

以上の三五首の分布を一覧して判るように、物語の前半には、中将と姫君と

の和歌のやり取りが多いのであるが、中盤以降になると、がぜんその様相を異にする。その最初は、三日間しか通わないと約束したにも関わらず、右大臣の姫君のところから一向に帰ってこない中将に落胆し、中将との生活を偲び、〈鏡〉〈琴〉〈笛〉〈枕〉〈柱〉〈夜のふすま〉のそれぞれに和歌を詠んで、左大臣の家を離れた三条東洞院の姫君の六首の歌である。

これ以前に複数の和歌が一挙に示されていたのは、結婚した右大臣の姫君へ三日目の夜に出かける直前に、中将が姫君との変わらぬ契りを誓いあった贈答歌だけであった。そうした傾向からすれば、三条東洞院の姫君が一挙に詠んだ六首の和歌が、どれだけ重い意味を持っていたかは容易に判断できよう。そして、こうした複数の和歌を一度に掲載する傾向は、それ以後は固定的なものとなっている。結論的に言えば、『しぐれ』の書き手は、和歌によって醸し出される情緒を重要視して、その雰囲気のもとに人物の心中を語ることに意を注ぎ、あるいは、その雰囲気や契機にプロットの展開を図ることを狙ったということである。

物語の後半は、帝と承香殿の女御の贈答歌を除けば、一三首の全てが中将の歌である。つまり、先の三条東洞院の姫君の六首の歌を見つけて詠んだ姫君を偲ぶ独詠歌二首、姫君を偲びつつ最後の参内に向かうときの独詠歌三首、〈中将が切った髻を侍従に渡した時に詠んだ二首〉、〈その髻に添えられていた三首〉、〈入道した後で、承香殿の女御たちの繁栄を耳にして、おとひに送った三首〉であり、それらはいずれも、三条東洞院の姫君である承香殿を念頭において詠んだものばかりである。もとより、物語に含まれている三五首の和歌は、いずれも三条東洞院の姫君に多少とも関わるものがほとんどであるが、和歌の持つ機能を最大限に發揮しようとする狙いが、物語の後半においては一段と鮮明なものになっている。

多くの和歌を列挙している例は、『宇津保物語』にいくらでも見ることができた。特定の行事などの場面を用いて、多くの人がそれぞれ歌を詠み、数十首にも及ぶ和歌が羅列されているところが何箇所もある(注2)。しかし、そ

こでの物語に及ぼす和歌の機能は、この『しぐれ』の場合と同列には扱えない。今、そのことについて詳しく論じることにはしないが、簡単に言えば、『宇津保物語』では、物語が獲得している時空を支えるものとして和歌が大きく機能しているのに対して、『しぐれ』では、中将と三条東洞院の姫君（承香殿の女御）との限られた悲恋物語を演出するものとしての機能に終始しているという違いがある。

しかし、こうした和歌の多用は、中世の物語の一つの方向性をあらわすものとして注目しておかなければならない。例えば、『住吉物語』の場合は、本文が徐々に増加するにつれて、和歌などが新たに挿入される傾向にあり、より文芸的な雰囲気の内容を指そうとする意識を認めることができるのであって、そうしたところに、『住吉物語』の改作の意識の一端を見ることができるのである（注3）。平安末期から鎌倉時代に書かれた多くの物語が、ややもすれば表現そのものよりも筋書き的な記述に走りがちな傾向にあったことを想えば、積極的に和歌を多用している『しぐれ』の書き手の意識は注目されてよい。

それほど長くはない物語であるだけに、『しぐれ』のこうした傾向は、物語作品の中世的な展開を理解する上に重要なのである。それは和歌に限ったことではなく、漢詩の朗詠も含まれている。『しぐれ』の中盤で、宮中での仏名の聴聞に出かけた三条東洞院の姫君は、その夜、侍従の伯母にあたる内侍の局に泊まったのだが、ちょうど内侍所の宿直に当たっていた中将が、内侍の局に御簾一枚を隔てて寝ていたのである。姫君はそのことを知っているが、中将は全く判っていない。そのような状況の中に、

(J) 有明の月影、やうやう山の端にかたぶきて、夜もすがら降る白雪、ふけゆくままに牙へまさり、心すみておもしろかりければ、中将、腰よりやてう（横笛）（やうしやう一岡。やうてう一多）取り出だし、盤渉調に音とりして、らうゑい（朗詠）をぞしたまへる。

暁梁王の苑に入れば 雪群山に満つ

夜庚公が楼に登れば 月千里に明らかなり（注4）

と二三遍したまひて、やさしく恨みたへなる（うらみこゑなる一岡・多）せう（簾）をぞあそばしける。雲の上まですみのぼり、おもしろくぞ覚ゆる。（九三頁）

と、中将に朗詠させている。有明の月が照る中で、夜もすがら雪が降り続けているという情景にマッチした漢詩ではあるが、この局面で物語が孕んでいる三条東洞院の姫君の心情とは、全く無関係な内容のものである。むしろ、中将は、ここに三条東洞院の姫君がいることも知らず、まして、右大臣側の呪詛によって、姫君との以前のことは全く忘却しているという設定なのであるから、それも仕方のないことではあろう。だが、そうした状況を設定すること自体が問題なのであって、書き手の意図としては、こうした雰囲気漢詩をここに挿入することに狙いがあったということである。その結果、姫君の苦悩は一方的なままで終わってしまい、むしろ、帝が中将の笛の素晴らしさを聴いたことによって三条東洞院の姫君へ行くときのお供として中将を指名したことから、姫君にさらなる苦痛を与えることになっている。

五 まとめ

中将の出家遁世も、三条東洞院の姫君が承香殿の女御として栄えたことも、観音の利生として、『しぐれ』は締めくくられていた。

(K) 姫君の果報も、中将殿のまことの道に入り給ふも、みなこれ観音の御利生なり。（一六九頁）

この一文がそれである（「多和本」では、さらに「いよ／＼くわんをんをしんこうし給ふ人はすゑもさかへはんしやうするなり」が付加されている）。しかし、この一文が、それまでの中将と姫君との悲恋の物語を充分に受け得ているとは、とても思われない。例えば、その直前に、入道している中将から送られてきた三首の和歌を見た承香殿の女御の心情は、次のように記されている。

(L) 姫君御覽じて、なをも恋しく思しめして、⁽¹⁾ 後の位にならせ給へども、つゆも嬉しとも思されず、御心のうちには、「あわれ、ただ契りしままに中將殿と一つ庵に住みて、憂き世を過ぎば、いかに嬉しかりなむ」と思しける。されども、ちから及ばせ給はず、いよいよ目出たく榮へ給ひけり。(一六八頁)

傍線部分の記述で明らかかなように、承香殿の女御は、中將のことを忘れてはいない。皇后になっても少しも嬉しく思ってもいない。中將とともに出家して、庵に住みたいと思つてゐるのである。承香殿の后としての栄華も、彼女としては決して望んでのことではなく、「力およばぬ結果としてあるにすぎないのである。

こうした承香殿の後の心境からすれば、「姫君の果報も……観音の御利生なり」として締めくくつたのでは、ほとんど説得力に乏しい、形式のみの記述であると言われても仕方あるまい。「多和本」に付加されている末尾の記述も、空しい響きが残るだけである。「しぐれ」は、物語の末尾に近いところにも、中將入道の和歌三首を並べている。それは、この物語の狙いは、和歌を多用することによつて、あくまでも中將と三条東洞院の姫君との連綿たる情緒を描出することにあった、ということ物語るものである。そのことは前節で論じた通りである。

しかし、それにも関わらず、観音の利生を説く(K)の一文を付してゆくところに、中世物語と信仰との抜き差しならない係わりを認めざるをえない。中世の物語とは、いったい何か、という問題が浮上するのだが、それは、書き手の身分の問題でもあると同時に、書かれた物語が、どのような範囲で享受されていたのかという事柄とも密接に連動してゐよう。そうした中世の物語の執筆を促す状況や要因とは何であつたのかを考える上で、「しぐれ」は有用な作品であつた。ただし、「しぐれ」については、さらに視点を変えて論じなければならぬことが多く残されてゐるので、それらについては、あらためて論ずる機会を得たいと思つてゐる。

(注1) 「しぐれ」のテキストは、「永正拾七年(一五二〇)卯月十一日」の古写本を定本とし、同系統の岡田真氏蔵の古写本(天文頃)と、多和文庫蔵の写本(寛永頃)との二本を脚注に示している横山重・太田武夫共校「室町時代物語二」(古典文庫、一九五五年)に翻刻されている本文に従い、適宜、漢字を当て、句読点を付した。なお、写本間に異同のあるときは、岡田氏蔵本・多和文庫蔵本の記述をも示した。

(注2) 豊島秀範「宇津保物語における場面と時間―行事と歌群との機能―」(弘前学院大学紀要「第一六号」第一六号。一九八〇年三月)。

(注3) 豊島「住吉物語」試論―年立上の期日と改作姿勢―(弘前学院大学紀要「第二〇号」一九八四年三月)。同「住吉物語」の改作姿勢―物語内引用としての試論―(弘前学院大学紀要「第一〇号」一九八四年三月)。同「物語文学の行方―小夜衣物語を中心に―」(弘前学院大学紀要「第一四号」一九八八年三月)。

(注4) 「和漢朗詠集」(日本古典文学大系)上巻、三七四・白賦。